

「さあ、出発しよう！！」

アーロンの掛け声に、一瞬沈みかけていた気持ちを取り直し、私は笑顔で頷いた。なんといっても、やっと待ち望んでいた亜丁との再会なのだ。ささいな事につまらない気分でしたのでは勿体無い。

先程のポーター少年は臨時のアルバイト(?)を得た事が嬉しいのか、ニコニコしながら私の脇に寄り添うように立っていた。背丈は高いがほっそりとした体格の、まだ幼さの残る頬っぺたの赤い可愛らしい顔をした少年だ。

私は先程からある事が気になっていて、必要以上にじっと彼の顔を見つめた。

「あなた、いくつ？」

「16歳」

「ねえ、・・・あなた私と会った事ない？」

彼はキョトンとした顔で首を横に振った。やっぱり違うのかあ～・・・

始めて亜丁を訪れた三年前の夏、私達の一行はある少年と知り合っていた。私達がキャンプ地として滞在していた<sup>ルオロンユウチャン</sup>洛絨牛場には、夏休みだというので遊びに来ている土地の少年たちも何人かいたが、その中でもとりわけ人懐っこく活発な、その少年と知り合った事が、二泊三日というほんの短い亜丁滞在の思い出の中に強烈な印象を残していた

\* \* \* \* \*

その日の朝、亜丁の公園入り口に到着した私たちは、馬に跨り次から次へと現れる素晴らしい景色に、感嘆の叫び声をあげながら意気揚々と洛絨牛場を訪れた。

成都を出てから4日間バスに揺られ続けて、やっとたどり着いたその旅での最終目的地、最後のシャングリラ「亜丁」を代表する景勝地ともいえる<sup>ルオロンユウチャン</sup>洛絨牛場は、青々とした牧草の中を、刷毛でなでたように黄色や薄桃色の高山植物が咲き乱れる美しい湿原だった。目の前に雄大に聳える聖なる山の万年雪と、氷河から溶け出してきた水が、三筋の滝になって岩肌を流れ落ち山裾に湿原を作っているのだ。湿原からあふれ出た水は、サラサラと流れる小川になって、ゆるやかに蛇行しながら湿原の中に点在する池を結び、鏡のような池の面

には、白い雲を浮かべた真っ青な空と頭上に白い雪を戴いた雄雄しい山の姿が逆さに写しこまれていた。そんな湿原の中を、土地の人達に放牧されている馬や牛が点々と散らばって、自由にのんびりと草をはんでいく風景はまるで描かれた一枚の絵のようだった。

成都から標高4000メートルの高さまで、一気にバスで駆け上ってきた為、数日前から続いていた高山病からくる鈍い頭痛も忘れ、景色に見惚れて走り回っていた私は、「昼食後にはまた馬に乗ってハイキングに行こうか」という案内人の烏里氏の言葉に飛び跳ねて喜んでいく。

しかし、高山の天気は変わりやすい。汗ばむほどに快晴だったお天気は、私達が昼食をとっているほんの数十分の間に、俄かに曇り始めたかと思うと、すっかり雨に変わってしまったのだ。楽しみにしていたホーストレックもこの雨で流れてしまい、馬達は恨めしげに見つめる私に背を向け、馬方に引かれて帰ってしまった。

そこがどんなに美しい場所であっても、山の中では雨に降られてしまうとどうしようもない。先程まで目の前にそびえていた雪山も、完全に霧の中に姿を消してしまい、山の写真撮影が目当ての男性陣は万に一つの望みを掛けて、山の方向にカメラを向け辛抱強くシャッターチャンスが訪れるのを待っていたが、写真に興味のない私を含めたやや年かさの女性陣4名は、合羽を着て所在無くキャンプ場の回りをウロウロしていた。

「もっと馬に乗りたかったのに、雨だなんて。つまらないなあ・・・」

湿原の中を歩き回り靴をドロドロにしながら、私は退屈な気持ちになりかけていた。

少年に出会ったのはそんな時だ。

亜丁自然保護区の中には、牛や馬の放牧をしている土地の人達もいて、時折石を積み上げたような牛番小屋が建てられているのが見かけられた。洛絨牛場にも2、3軒建てられていたそんな小屋のそばを私達が通りかかると、中から少年が顔を出し、笑顔で何か叫びながら、おいでおいでと手を振っている。

何故、呼ばれているのかもよく解らないまま、相手が子供だったことで警戒もせず、「面白そうだから行ってみようよ」と近寄っていくと、少年は、どうぞどうぞと小屋の中に招き入れてくれた。石と泥で塗り固

められた薄暗い小屋の中には二人の少年がいた。すすめられるまま土間の小屋の中に転がしてある丸太の上に腰を下ろし、私と母のつたない中国語でたどたどしく話を聞くと、13歳と14歳の兄弟だという二人は、近所の村に住む少年達で、夏休みだからここに来て遊んでいるのだということだった。初めのうちは、疑問に思っていたのだが、彼らが私達を小屋に招き入れた事に他意はなく、ただ外国人がきたからお茶に呼んでくれただけの様子だ。

亜丁が観光地として外国人に解放されたのは、ほんの数年前だと聞いていた。きっとそれまでは他所の土地から訪れる人も少なく、閉ざされた僻地の村で過ごしていたのであろう少年達にとって、突然自分達の土地に現れるようになった外国人が、珍しくて面白かったのだろうが、それにしただって、彼らの年頃の少年達が自分の母親や祖母と同年代の見知らぬ外国人女性を家に招いてもてなしてくれるなんて、日本の少年達では想像できない話だ。

兄だという少年は無口で大人しかったが、やんちゃそうな弟の方は、好奇心に目をきらきらさせながら、一人前のしぐさで小屋の真ん中に作られた囲炉裏に火をおこし、お茶を沸かしてくれたり、新聞に包まれて無造作に土間に転がしてあったチベット式のパンを食べないかと勧めてくれたり、果ては懐からタバコを取り出して勧めてくれたりと懸命にもてなそうとしてくれるのが微笑ましくて可愛い。

私達が笑いながら、彼が勧めてくれたタバコを断ると少年は自分用に一本抜き出し、慣れた手つきで囲炉裏の薪から火を付け、生意気そうに頬を傾けタバコを吸うしぐさも様になっていた。

「あらっ！あなたみたいな子供がタバコなんて吸っちゃいけないんじゃないの～！？」

すでに退職されているが以前は小学校の教師を勤めておられたという、この旅行で一緒にさせていただいた、Oさんが生真面目な声を上げたのが可笑しくて、私はクスクスと笑ってしまったが、日本語を解さない少年は何故、自分が笑われているのか解らずにキョトンとしていた。

そういえばこの日の朝、私達が乗ってきた馬の手綱を引いていた、どう見ても10歳くらいに見える馬方の少年もスパSPAとタバコを吸いながら歩いていた。

こんな山奥の土地では少年がタバコを吸うことなど普通の事で、身体に悪いなどと咎める大人はいない



少年たちに招待された洛絨牛場の牛小屋

のだろうか。

まだ出会ってから十数分しかたっていなかったが、急速にこの少年に好意を感じてきていた私が、先程の雨にあたり濡れていたスカーフを首からはずして、囲炉裏にかざそうとすると、すかさず「俺が乾かしてあげるよ！」と少年は、くわえタバコのまま私からスカーフを取りあげ、注意深く広げながら火の上にかざして乾かしてくれたのだった。

これにはグツときた。見た目はまだまだ子供だが、チベット人の男の子ってかっこいいじゃないか～！！・・・そういえばタイやネパール、マレーシア、今まで訪れたどの国の子供達を思い返してみても、田舎の子供はよく働いていた。日本の多くの子供たちが親の庇護の元、遊んだり学校の宿題さえしていればいような年頃から、水汲みや掃除、幼い兄弟の世話に薪運びなど、一家の労働力として当たり前働いてきた少年達は、見た目は子供でも日常生活レベルの能力に関しては、すでに大人の仲間入りしてるように感じられた。

それは、すっかり機械文明に侵食されてしまった現代では、その価値を認められなくなりつつあるのだが、自然の中で生きるためには、必ず必要とされるはずの「原始的な意味での生活能力」というものを感じさせ、常日頃、「昨今の去勢されて野生を失ったような、日本男性には魅力が感じられないわ！！」などと、己の魅力レベルについては一切省みることなく一方的に憂いていた私は、中国の山奥で、まだほんの13歳だという何処から見ても子供の彼に、思いがけず一人前の男の片鱗を感じハッとしたのだった。

数分後、少年が笑顔で渡してくれたスカーフはほんのりと暖かく、煙の香ばしい匂いがしみ込んでいた。

(次号に続く)